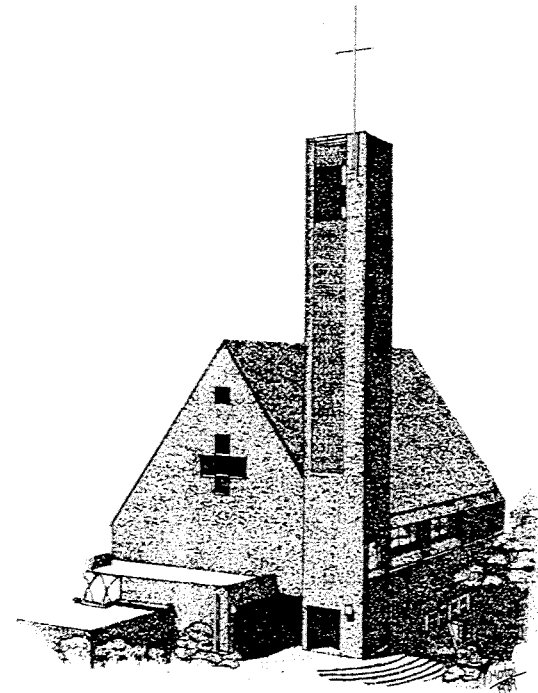


チャペル ブックレット No.7

—— 1992 秋の宗教講演記録 ——

心を支えているもの

山本将信
牧師



名古屋学院大学 宗教部



山本将信牧師の紹介

山本牧師は1937年に鳥取県にお生まれになり、東京神学大学をご卒業になりました。現在、東京西片町教会牧師です。

1992年11月20日、宗教部主催の秋の宗教講演会でお話いただきました。

心を支えているもの

今日は「心を支えているもの」と題して話をいたします。人間の心を支えているもの、人間が人間であるための条件を話そうと思うのです。

最初に結論を言いましょう。人間が人間であるための条件は五つあります。第一は信じること、次に希望です。三番目は愛。四番目は自由。そして最後は誇りです。これが人間が生きていく条件です。このうち一つを欠いても私たちは生きていくことができません。死んでしまうということです。これが生きていくためにどうしても必要な五本の柱なのです。

信じること

第一の条件は信じることです。人間が人間を、またその他の何かを信頼するということです。信という字は人べんに言と書きます。人の言葉が信なのです。私たちの生きている世界には信頼が網の目のようにはり巡らされていて、まるで命綱のようです。それがなければ生きていけないのですが、これがちょっと切れたり、小さな破れができただけで、私たちは悩んだり苦しんだりするのです。

失恋をしたり、人に裏切られた人が「もう何も信じない」と言うことがあります。しかし人は何も信じないで生きていくことはでき

ません。人間の生活は信頼のうえに成り立っているのです。たとえば電灯のスイッチをONにすれば明るくなると信用しているからスイッチをいれるのですし、赤信号で車が止まってくると信頼しているから横断歩道も歩けるのです。

人間についても「もう誰も信じない」と言ったところで、バスの運転手さんを信じているから、バスに乗って目的地へ行けるのですし、喫茶店で飲むお茶には毒が入っていないと信じているから飲めるのです。あたりまえのこのように思っているけれども、この信頼の網の目のなかに生きているのです。

この網の目が最もズタズタにされるのが戦争です。戦争という状況に置かれたとき、信頼というものがどんなに大切であるかが分かるだろうと思います。

作家の曾野綾子さんの書かれたもののなかに、第二次世界大戦の沖縄戦のことについての聞き取り調査をしたときのことがありました。そのお話を紹介しましょう。

ご存じのように沖縄は日本中で唯一地上戦があったところでした。ここにひとりの少女がいました。彼女は両親が自決して、まだ赤ちゃんである弟とふたりだけで残されました。もちろん食べるものはとうになく、もう餓死寸前でしたが、死んだ両親からもまわりの大

人たちからも「アメリカ人は決して信用してはいけない」と言われていました。

そこにまだ若いアメリカ兵がお菓子をさしだしたのです。「アメリカ人のくれる食べ物のなかには毒がはいっているから決して食べてはいけない」と言われていましたが、その少女は「どうせ死ぬのだから、このおいしそうなお菓子を食べて、その毒で死ぬのならそれでもいい」と思ったのです。そしておそろおそろそのアメリカ兵の方に手をさしだしました。すると突然その若いアメリカ兵は号泣しだしたのです。

その号泣の理由はお分かりでしょうか。この悲惨な戦争のなかで、信頼とか信用というものは、まったくなくなった世界で、この少女は自分のさしだしたお菓子を食べてようと手を出してくれたのです。少女は自分を信頼してくれている、この思いに彼は号泣したのです。

生きるということは信じるということと同じなのです。

希望

人間の条件の第二は希望です。私たちは個人でも社会でも、目指す望みがなければ、生きていくことはできません。望みとは夢なのです。マルティン・ルーサー・キングは「私

には夢がある」と言いました。黒人と白人が共に手をつないで生きていくアメリカの実現という夢があったのです。

私たちは寝ている時にも夢をみます。それに関してある精神科医がおもしろい実験をしました。夢をみているとそれは脳波にあらわれますから、眠っている人が夢を見ているということは外から分かるそうです。そこで眠っている人を二つのグループにわけ、第一のグループの人は、夢をみていない時、つまり熟睡している時に起こされます。もうひとつのグループの人は夢をみている時に起こされます。どちらが機嫌が悪いと思えますか。熟睡している時に起こされるほうがくやしくて機嫌が悪くなると思いませんか。ところが眠りが浅く、夢をみている時のほうが機嫌が悪いのだそうです。

人間が心のバランスをとるためには夢をみるということは必須条件だそうです。

これは寝ているときの夢の話ですが、生きていくときの夢、言い換えれば希望も同じように絶対必要です。

フランクという精神科の医者で思想家がいます。第二次世界大戦の時、彼はユダヤ人であるために強制収容所に入れられました。そしてご存じのように約 600万人のユダヤ人

がそこで殺されました。彼は幸い生き延びましたが、収容所での出来事を精神科医として克明に書き綴ったのが有名な『夜と霧』です。

そのなかに「希望というのはあったほうがよいものではなく、なければならぬものである。」という文章があります。あるとき強制収容所のなかに「今年のクリスマスはここを出ることができる」といううわさが流れました。肉体的にも精神的にも疲労困ぱいしていた人々はそのうわさにしがみつきました。

「クリスマスになれば……」と希望を持ったのです。しかしクリスマスが来ても誰も収容所から出ることはできませんでした。そのあと何がおこったと思えますか。クリスマス過ぎからバタバタと人が死んでいったのです。これは「クリスマスになれば……」という希望を失ったことが大きな理由でした。希望がないという状態は死ぬということなのです。

私たちはそんな極限の状態ではないけれども、それでもどんなときも希望、夢がなければならぬということは本当です。

私自身の話をしましょう。私は小さいときに両親を亡くし、兄に育てられたのですが、兄は私が中学2年の時に倒産してしまいました。そこで私は中学をでるとすぐ大阪に働きにでました。しかし働いている間に結核にかかり、療養所に入ることになりました。目の

前が真っ暗になったのをおぼえています。療養所ではほんとうに打ちのめされたような気持ちの毎日でしたが、そのなかで私は通信教育を受けて細々と勉強していました。あるとき私は同じように勉強していた先輩にふっと「勉強して大学にいきたいな」と言ったのです。そのときの私は通信教育での高等学校の途中でしたし、もちろんお金だってありません。しかしその先輩はそれを知っていて「君ならいけるよ、できると信じて勉強すればきっといけるよ、がんばれよ」と励ましてくれたのです。最初は何を勉強しようという具体的なものではなかったのですが、そのときから私は夢を持ったのです。そのうちその夢は神学大学に行って牧師になろうという具体的な形を持って膨らんでいきました。

そしてその夢は実現しました。自慢じゃありませんが、私は誰からの仕送りもなく、神学大学、大学院を卒業したのです。やってみるとなんとかなるものなのよ。あのときあの療養所で、健康もお金もなく、学力もまだまだという私が、あの夢を持たなければ、あの希望を持たなければ、今日の私は決してなかったでしょう。

みなさんに夢はありますか？ 大きな夢をもっている人は生き生きして見えますね。でもそれだけではありません。夢のない人は死んでいるのも同じなのです。夢を持つ、希望

を持つということと、生きていくというのは同義語なのです。これが人間の心を支えている第二の柱なのです。

愛

第三番目は愛です。愛という誰の耳にもこころよいこの言葉は現代の社会ではキーワードのように使われています。愛はずっと昔から言葉としてはありましたが、それは仏教という煩惱のひとつで、あまりよい意味ではなかったのです。

愛という言葉が現代のような意味で使われるようになったのは、明治時代になって新約聖書が翻訳されてからです。当時、教養のある人は外国語を読むことができました。と言ってもそれは英語でもなければドイツ語でもありません。それは漢語でした。漢語の聖書を日本語に翻訳したわけですが、そこに愛という言葉があったのです。

いまや歌謡曲だって、広告のキャッチフレーズだって、文学作品だって、教育だって、哲学だって、どこにでも愛という言葉はゴロゴロしています。しかし私に言わせればこの言葉はまだ十分に日本語になっていないと思うのです。日常語として使うのはまだ難しいでしょう。英語の I love you. というのはもっと日常語化しているのでしょうかね。

けれどもこの愛が私たちを支えていることはおわかりいただけだと思います。人間と人間の愛、それは男女の愛は言うにおよばず、友情でも、親子の間でも。また相手が人間でなくてもです。

明治時代、聖書を翻訳したときに愛という言葉を使ったわけですが、それ以前はどうだったのでしょうか。織田信長の時代にキリスト教はクリシタンと言われてずいぶん広がりました。そのころは愛はどんな言葉に訳されていたのでしょうか。それは「大切にする」と訳されていたのです。「神を愛する」というところは「デウスを大切にしまつること」という言葉に訳されていました。実に味わいのある言葉だと思いませんか。現代、愛という言葉はムード的でわりと曖昧なまま使われています。けれどもこの「大切にする」という訳語は愛の持っている意志的な面をはっきりと表していると思うのです。

大切とはどんな意味でしょうか。それを考えるためにまず親切という言葉の意味を考えてみましょう。親切というのは親を切るのでしょうか。いいえ親が切るのです。たとえば食べ物を親が切って子どもに与えるのが親切です。そしてそのとき、大きく切って与えるのが大切という意味なのです。

今の日本は飽食時代で、食べ物はあまるほ

どあります。日本の歴史上で、いいえ世界の歴史上でこんな時代があったでしょうか。こんな時代ではなく、食べ物のない時代に少ししかない食べ物を人のために大きく切る、これが大切にすることなのです。愛の持つ意志的な面とはこれです。

これが食べ物でなくてお金だったらどうでしょう。私は時々、ほんとうに時々ですよ、お酒を飲みについて、家で飲めば1000円ですむところを、3000円とか4000円とか使ってしまう。それをそんなに惜しいとは思いません。しかしこれがたとえばアフリカの子どもたちのためのカンパだったら、私は牧師ですが、ちょっとねえ、と考えてしまいます。飲み屋で惜しくないのに、カンパには惜しいのです。このカンパには強い意志が必要なのです。愛のもつ意志性はここによく表れていると思います。

今から30年くらい前の話ですが、レバノンで戦乱のあと孤児のための、特に赤ちゃんのための当時では最高の近代的設備を持った立派な施設をつくりました。そしてそこに戦争で親を失った子どもを収容しました。しかし子どもの数が多くて収容できなかった子どもは仕方がないので、既成の施設に収容しました。ところが驚くべきことがおこりました。

立派な施設に收容された子どもたちの死亡率がグンと高くなったのです。そして死なないまでも知恵遅れの子どもがたくさんできてしまったのです。既成の施設に收容した子どもたちは普通に育ちました。どうしてこんなことがおこったのでしょうか。

理由は簡単だったのです。近代的な施設では清潔で便利ですが、合理化されていてなるべく人手をかけないですむようになっています。ですから赤ちゃんは寝かされたままで、時間がくれば栄養のあるミルクが哺乳瓶から与えられます。一人の看護婦が大勢の赤ちゃんを看ることができるようになっているのです。

ところが既成の施設には、そんな近代的な設備はありませんから、そこにあずけられた赤ちゃんはひとりひとり看護婦に抱かれて、目をあわせ、話しかけられながらミルクを飲まされました。そこに二つの施設の違いがあったのです。

これは結果的には恐ろしい実験、生命にかかわる実験となってしまいました。どんな近代的な設備も、清潔さも、高い栄養のある食べ物も、だっこされて「いい子ね」と話しかけられる愛情にはかなわなかったのです。

フランス革命の三つの柱は自由、平等、博愛です。このうち自由と平等はある程度は制

度になり得ます。法律にすることができるのです。ところが博愛だけは制度、法律にならないのです。たとえば言論の自由などは法律で守られていて、それに反すれば罰せられます。

平等についての法律も、たとえば男女雇用機会均等法などがありますね。

しかし法律で「愛しなさい」ということはできません。法律で決めても仕方のないことなのです。『六法全書』のなかに愛という言葉はたった一箇所だけ、憲法の前文に「平和を愛する」という形ででてくるそうです。こんなに世界のキーワードになっている愛という言葉があんな厚い本のなかに一箇所しか出てこないなんて、考えてみればおかしいことですね。でも愛は法律にはならないのです。

愛しあったふたりが結婚するときには婚姻届けに署名します。あれは確かに役所に提出するのですが、愛の証明書にはなりません。いくら婚姻証明書があっても、ふたりの間に愛がなくなったときは、その証明書も署名も印鑑も何の役にもたたないからです。

どんなに自由な世界をつくっても、平等な世界をつくっても、その世界に愛がなければそこは地獄です。

自由

次は自由です。自由という言葉は自らで決めるという意味で、自分で考えたいことを考え、言いたいことを言い、したいことをするということです。しかしこれは大変です。なぜなら、その考えたこと、言ったこと、したことには全部自分で責任をとらなくてはならないからです。自由には必ず責任がついてきます。これは重いことです。

またこの五つの柱のなかで一番コストが高いのは自由でしょう。よく子どもが大きくなると、両親から自由になるために、ひとりで暮らしたいなどと言います。ひとりで暮らすということは、母親の小言も、父親の叱責もありません。気楽です。自由です。しかし部屋代はかかるし、何かことが起こっても誰も守ってくれません。随分高くつくのです。

もうひとつ大切なことは、自分の自由と他人の自由は両立しないことがあるということです。折り合いが難しいのです。しかし私たち人間は自由がなくては生きていくことはできません。

私はあるとき、高校生がいわゆる家庭内暴力で困っているという相談を持ちかけられ、お宅を訪ねたことがあります。その高校生は小さい時からずっといい子で親の期待どりに育ってきました。勉強もよくできてよい高校に入学しました。ところが入学したとたん

に親が右と言えば左、白と言えば黒と反抗が始まりました。そしてあげくのはては殴る蹴るの暴力が始まったのです。

その子は長い間、自分というものを探していたのではないのでしょうか。彼は小さいときからずっと「いい子」を演じてきました。こうすれば親が喜ぶだろう、親はきっとこうすることを望んでいるだろうと、いつもまわりの期待からずれないようにと考えて行動してきました。つまり自分以外の人間に基準を合わせていたのです。

そのうち、ほんとうは自分はどう考えているのか、どうしたいのかがわからなくなりました。自分がなくなってしまったのです。そしてその失った自分を探しだすということが暴力となってあらわれたのです。自分が自分らしくあるということが自由であるということですから、彼は自由を求めていたということができません。

私たちは個人でも、社会でも、国家でも、自由というものをなくしては生きていけないのです。旧ソヴィエトなど社会主義国家がくずれたのは、彼らがめざしていたものが間違っていたわけではないのです。平等な社会をつくるために犠牲にしたものが自由だったからなのです。自由を失えば、いかに平等な国家も崩壊してしまうのです。

誇り

最後は誇りです。自尊心がなければ、人格は必ずくずれます。新約聖書のなかにパウロという人がでてきます。誇りという言葉は彼が好んで用いた言葉のなかのひとつです。たとえば「私は弱さを誇る」とか「誇るものは主を誇れ」という言葉は有名です。

みなさんは何に誇りを持って生きていますか。誇りには二種類あって、まるでコレステロールのようなものです。血液中のコレステロールは一般には悪いものと思われていて、高血圧の人などはその値をいつも気にしています。けれどコレステロールにも悪玉と善玉があるそうです。

同じように誇りにも悪玉誇りと善玉誇りがあります。誇りの悪玉とは人と比べるときにおこります。「オレはアイツより頭がいい」「オレのほうが金持ちだ」という具合です。この誇りは簡単に裏がえって劣等感になります。「どうせオレは頭が悪いから」「どうせ貧乏だから」と変わるのです。

私の教会の近くに東京大学があります。ふつうは東京大学の近くに私の教会があるというのかもしれませんが、東大の学生もたくさん教会にきますが、地方で同級生と比べて成績が良いというだけで、入学した学生は、そこに来ているのはみんな秀才ですから、ちょっ

としたことで劣等感におそわれます。すると自分は勉強がよくできるという誇りはすぐにつぶされてしまいます。そういう誇りは悪玉誇りなのです。

もうひとつの誇り、善玉誇りは絶対的な誇りです。決して人と比べたりはしません。また人の評価に依存しません。そういう誇りが必要なのです。それがなければ強く生きていくことはできません。

パウロが「自分の弱さを誇る」と言ったその弱さは彼の病気です。病名はよくわかりませんが、どうも不名誉な恥ずかしい病気だったようです。病気に名誉な病気があるとは思えませんが、とにかくパウロは神さまに「この病気を治してください」と必死で祈り続けました。その祈りに答えた神の言葉はなんと「あなたに対する恵みは十分だ」というものでした。「神の恵みは弱いところにあらわれる」というのです。

パウロは「治らない病気ならば、それは受け入れよう。私の私らしさをこの病気によって現わしていこう」と考えました。「病気という弱さを私の誇りにしよう」という考えになったのです。治らない病気なら開き直ってそこに命を見つけようという逆転の発想なのです。

あるとき、私は飲み屋で隣にすわった若者

と話をしました。彼は「オレは女性にもてないし、金はないし、学歴もないし……」とグチるのです。私は「オレもそうだけれど、けれどオレは世界でナンバー1だと思っているよ」と言いました。若者は「何といううぬぼれおじさんだ」と言いましたが、だってそうでしょう、歴史上でも、世界中でも私は私ひとりしかいません。比べようがないのです。他人と比べないで、絶対的なもの、たとえば神さまとの関係でしか考えませんから、ナンバー1なのです。誇りを持って生きるというのはそういうことなのです。

パウロのように治らない病気があるなどというのは不運なことです。また飲み屋で私の隣に座った若者のように「女性にもてない」というのも不運なことかもしれません。そのように運、不運は自分で決めることができないでしょう。でもそれは幸福、不幸ということではありません。幸福、不幸は自分で決めてほしいと思うのです。

運がよくても不幸な人はいますし、不運でも幸福な人はいます。もちろん、運がよくてなお幸福な人がいて、それが一番いいに決まっています。しかし長い人生、いいときばかりとは言えないでしょう。運が悪いことに耐えていくことによって、またそれに打ち勝つことによって、自分を高め、深めて、自分を生かして、はじめて幸福になれるのです。

みなさん、おたがいに信頼しあい、夜寝ているときは夢を見、起きているときはもっと大きな夢を見て、愛し、自由を求め、他との比較ではない絶対的な誇りを持って、唯一絶対な何かを求めて生きていってほしいと思います。豊かな人生を歩いてください。

1992 秋の宗教講演会ご案内

(Part II)

心を支えているもの

とき 11月20日(金)

午前 11時25分～12時30分

ところ 名古屋学院大学 C 教室

講師 日本キリスト教団 西片町教会

山本 将信 牧師

どうしようもないわたしが歩いている

これは放浪の自由律俳人、種田山頭火(たねだ・さんとうか)の俳句です。わたしたちの心を支配しているものは、たくさんあります。たとえば、金銭欲、性欲、権力欲……。しかもそれらに、始終ふりまわされています。

では、わたしたちの心を支えているものは、あるでしょうか。「どうしようもないわたし」を支えているものが……。

主催 名古屋学院大学 宗教部

TEL. 0561-42-0348

チャペル ブックレット 発刊にあたって

本学の開学(1964年)以来、宗教部では毎年、春と秋に「宗教週間」を設けて、折りにかなったテーマと講師を与えられて、学生諸君と共に学んでまいりました。

その講演内容は、宗教部の機関紙「麦粒」に掲載してまいりましたが、貴重な講演を、いつでも手にとって読める形にまとめてはどうかとの提案を受けて「チャペルブックレット」として発刊することにいたしました。

このチャペルブックレットが、本学の学生諸君をはじめ、多くの方々に刺激を与え、問題を提起し、より深い認識と行動へかりたてるきっかけになることを願っています。

1989年11月

宗教部長 梶原 寿

チャペルブックレット No. 7

1993年11月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部
〒480-12
瀬戸市上品野町1350
TEL 0561-42-0348

印刷 泰光株式会社

チャペルブックレット

●既刊

- No. 1 経済の論理と人間の論理
エコノミック アニマル日本
恵泉女学園大学教授 塩沢 美代子
- No. 2 心を問い続けて
北海道家庭学校校長 谷 昌 恒
- No. 3 国際化時代におけるキリスト教の使命
韓国の視点から
梨花女子大学教授 徐 洸 善
- No. 4 激動する現代史と神のみことば
東京女子大学教授 池 明 観
- No. 5 生きることの感動
豊島岡教会牧師 金 纓
- No. 6 生きるよろこび
フリーアナウンサー 村田 佳寿子
- No. 7 心を支えているもの
西片町教会牧師 山 本 将 信